

〔論 文〕

Mongyul-un sonin bičig (1909-1918) という モンゴル語定期刊行物

—モンゴル語定期刊行物史における位置づけと所蔵状況¹—

フフバートル

The Periodical *Mongolyn sonin bichig* (1909-1918): Its position in the history of
Mongolian periodicals and where surviving issues can be found

BORJIGIN Huhbator

The *Mongolyn sonin bichig* is a Mongolian periodical published in Harbin from May, 1909 to December, 1918 that is widely understood to be a potent medium for the Mongolian independence movement. It started as a magazine, but from September, 1912, it became a newspaper. In spite of its historical importance, few issues still exist and this hinders comprehensive research. About half a century ago G. Deleg, a researcher from the Mongolian People's Republic, for instance, studied this journal as an example of newspaper media using the limited materials available to him. Even today there are few studies on this periodical.

This paper aims to provide further detailed information about the *Mongolyn sonin bichig* based on the result of the author's research worldwide over the past 20 years, and discusses some problems such as the title, the evaluation, and the purpose of the publication. The author also questions the credibility of the believed editor of this periodical, Haisan, who was, in the history of Mongolia, an important intellectual.

Key words: *early Mongolian periodical* (初期モンゴル語定期刊行物), *Mongolyn sonin bichig* (蒙古新聞), *modern history of Mongolia* (近代モンゴル史), *Haisan* (ハイサン)

はじめに

20世紀の初期は大清国の末期でもあった。ロシアと日本の攻勢により、周辺諸民族への統治に危機を感じた清朝は、モンゴルへの宣伝を強化し、1908年4月に *Mongyul üsüg-ün bodurul* (蒙話報) という「蒙漢合璧」の雑誌を吉林で創刊した。次いで、帝政ロシア側は1909年5月に *Mongyul-un sonin*

bičig (蒙古新聞) というモンゴル語の定期刊行物をハルビンで創刊した。その目的をモンゴル人の啓蒙のためとしたが、100年が経過した現在、それらのモンゴル語定期刊行物はいずれも近代モンゴル史、モンゴル民族近代出版史、現代モンゴル語書写語の形成を研究するうえで貴重な一次資料となっている。しかし、これらの定期出版物は清朝とその後の中華民国領内で比較的長期にわたって刊行されてきた

1 本稿は、筆者が1995年1月に一橋大学大学院社会学研究科に提出した博士課程後期「単位修得論文」であった「モンゴル語定期刊行物史にみる言語問題——モンゴル語発展史及び内モンゴルの言語問題の一端」における第三章「過度期の定期刊行物に垣間見る民族独立と民族の分断——*Mongyul-un sonin bičig* という定期刊行物——」に基づくものである。執筆から20年が経過しているが、その間、筆者自身による資料調査が継続され、本定期刊行物に関しては、1996年ころの東京外国語大学、2009年9月のモンゴル国国立中央文書館、2013年9月のアメリカのインディアナ大学図書館、2014年9月のロシア連邦サンクトペテルブルグにある諸資料館での調査の成果などを踏まえて大幅に書きかえたものである。

にもかかわらず、現在の中国領内ではほとんど所蔵が確認されていない。その理由として、背景にモンゴルをめぐる大国間の争いがあり、これらの定期出版物がいずれかの国や民族の利益を代弁するプロパガンダ的性格をもっていたことが考えられる。こういう意味では、創刊が上記刊行物より遅かったが、日本側が1918年8月に奉天（現瀋陽）で創刊した *Mögdün-ü mongyul sedgül*（奉天蒙文報）も同じで、清朝崩壊以降のロシア側のモンゴル語新聞 *Mongyul-un sonin bičig*（蒙古新聞）に対抗して創刊されたものとみられる。その時点で、中華民国成立後もしばらく刊行が続いた *Mongyul üsüg-ün bodurul*（蒙話報）はすでに廃刊となり、ロシアの十月革命後立場が不安定になってきた *Mongyul-un sonin bičig*（蒙古新聞）も現在確認できる限りでは1918年12月に廃刊となり、満洲におけるモンゴル語定期刊行物は日本によって独占された。

Mongyul-un sonin bičig（蒙古新聞）は、創刊当初は毎月2回刊の雑誌であったが、編集者の交代を契機に1912年9月より週刊新聞になったとみられる。中国領内で刊行された最初のモンゴル語雑誌としての *Mongyul üsüg-ün bodurul*（蒙話報）が現在確認できる最終号の第33期（1913年）まで石版印刷であったのに対し、*Mongyul-un sonin bičig*（蒙古新聞）は1909年の創刊当初から活字印刷であった。この点は当時の清朝領内で出版されたモンゴル語の出版物にとって、また、モンゴル語の近代出版史においては画期的なできごとであり、帝政ロシアのモンゴル研究およびモンゴル語出版の優勢を示すものであった。ちなみに、日本側が1918年に創刊した *Mögdün-ü mongyul sedgül*（奉天蒙文報）も活字体であった。それに対し、中国側のモンゴル語の活字印刷は1922年のテムゲトによる「創造」を待たなければならなかった。一方、外モンゴルでは、1913年3月にフレー（現ウランバートル）で創刊された *Sin-e toli kemekü bičig*（新しい鏡という書）という雑誌が最初の定期刊行物で、創刊当初から活

字体であった。その活字はペテルブルグから持ってきたため、*Mongyul-un sonin bičig*（蒙古新聞）の場合と字形に若干の違いが認められるものの、同一の活字体であったと考えられる。

Mongyul-un sonin bičig（蒙古新聞）についての情報は、旧モンゴル人民共和国のG. デレグ（Deleg）の研究（1965）によって知られる。モンゴル国では歴史学者たちが時折参考資料にあげることがあるが、それはモンゴル国国立中央文書館に所蔵されている号に限られることが多く、G. デレグが参考にしたロシアの資料館に所蔵されているすべての号を参照しているわけではない。内モンゴルでは定期刊行物の研究で知られるトゥイメル（忒莫勒）が限られた資料を生かし、意欲的に分析をしている。最近、日本では内モンゴル出身の大学院生ボルジギン・ブレン（布日額、京都大学）が本定期刊行物について、歴史学や新聞メディアの視点から研究発表を行っている。ブレンは先行研究としてウスペンスキーの研究（Uspenskij V. L. (1987) “Jurnal «Mongol-un sonin bičig» o sobyt'yakh v Mongolii v 1911-1912”）を取りあげている²。

本稿は、本定期刊行物の情報と資料収集を長年継続してきた筆者自身の調査成果を踏まえ、モンゴル語定期刊行物史における本定期刊行物の位置づけをモンゴル民族の近代文献資料の視点から考察するものである。本定期刊行物がモンゴル研究においてより多くの研究者に注目され、活用されるよう文献資料の情報提供を目指したい。

一. 日本外務省の資料に見る *Mongyul-un sonin bičig*（蒙古新聞）

Mongyul-un sonin bičig というモンゴル語定期刊行物の刊行については、これまで前記G. デレグをはじめ、旧モンゴル人民共和国の学者たち、またはロシアの外交官などが述べてきた。近年は、日本の外務省の資料として「哈爾濱發行蒙古新聞ニ関スル件」³（写真①）が知られ、この資料を利用した研

2 ボルジギン・ブレン（布日額）2012, 36-37頁, 56頁。

3 国立公文書館アジア歴史資料センター・レファレンスコード: B03040837700。

究が現れている⁴。本稿では *Mongγul-un sonin bičig* の刊行についての分析に先立ち、まず本資料の内容を確認し、本稿にとって重要な部分を現代語の表現で整理しておきたい。

「哈爾賓發行蒙古新聞ニ関スル件」は、大正3年(1914)8月17日、日本外務省在哈爾賓総領事代理領事官補の川越(名前の部分不明)が外務大臣加藤高明宛に書いた手書きの文書(同総領事館用箋全6枚)で、送附先は在北京代理公使であった。「蒙古新聞」という *Mongγul-un sonin bičig* の訳名には「モンゴルンソーニンピチック⁵」と振り仮名を付ける形で同新聞のモンゴル語名称も書いてある。この文書は同定期刊行物の「沿革其他経営等」に関し、同新聞の記者であったモンゴル人が領事館通訳の黒田に話したことをまとめたものであった。同資料は写真資料として閲覧できるが、その扉に付された紹介文は次の通りである⁶。

哈爾賓総領事館／2 大正3年8月17日から大正8年1月9日

資料作成年月日：／作成者：外務省

内容：公第一一五号 大正三年八月十七日 在哈爾賓総領事代理領事官補 川越@ 外務大臣男爵 加藤高明殿 哈爾賓發行蒙古新聞ニ関スル件 当地ニ於テ蒙字頁蒙古新聞モンゴルンソーニンピチック発刊ニ関シテハ客月二十九日付政機密第三七号拙信ヲ以テ及報告置候処本紙沿革其他経営等ニ関シ同新聞記者(蒙古人)ノ当館黒田通訳ニナシタル談話並ニ最近発刊ニ係ル本紙記事中摘訳相添ヘ何等御参考ノ一端マデ茲ニ及呈報候敬具 本信写送附先 在北京代理公使 哈爾賓ニ於テ発行スル蒙古新聞 蒙古新聞ニハ遠東報主筆スピイツィン(同人ハ本年五月間哈爾賓在住ノ儘

黒龍江省民政顧問ニ任命セラレタリ)ヲ監督者トシ、蒙人記者主筆(月給百留)副主筆(全七十五留)支那語通訳兼記者(以下略)

写真資料によれば、「蒙古新聞」は遠東報主筆のスピイツィンを監督とし、モンゴル人主筆と副主筆、中国語通訳兼記者、植字職工二人のほか、遠東報記者を兼任するロシア人二人を雇用し、多大な費用を投資して発行を続けてきたが、外モンゴル独立後はただちに記者の出身地と新聞の頒布地を変えた。

本定期刊行物は、1909年に、東清鉄道が漢語と満洲語に通じたハラチン旗モンゴル人のアルマスオチル(阿爾木薩鄂齋尔, 漢名趙壽彭⁷, 46歳)を招聘して主筆とし、ほかに二名のハラチン人を記者とし、遠東報主筆を編集監督として遠東報館で創刊された。

創刊当時は、雑誌体の小冊で、毎月2回、毎号を約1000部発行し、無償で内外モンゴルと北京などに配布することにより、モンゴル人の間に親露思想を鼓吹するよう努めた。

主筆に関しては、1911年5月にアルマスオチルがハルビンで客死したため、彼の未亡人の推薦で漢語とモンゴル語の素養があるハラチン人ソドノム(蘇達納睦, 漢名蘇子愚)をアルマスオチルの後任とし、編集に充てたが、その時、外モンゴルで独立宣言が行われたため、彼は新しい政権に必要な人材とされ、1912年2月に大蔵次官としてフレ(現ウランバートル)に赴いた。ソドノムは自分の後任として、ハイラルで旅館業を営んでいた知人のハラチン人王順をハルビンに呼んだが、彼は無学で、漢文の素養がなく、モンゴル語を話すのみで、主筆という職務にはまったく不適任であったため、1912年6月に、その友人で漢語とモンゴル文に通じるハラチ

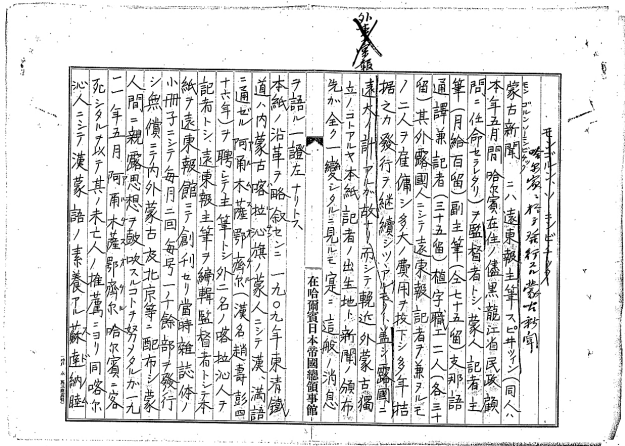
4 忒莫勒 2009 とボルジギン・ブレン(布日額) 2012。

忒莫勒 2009 には「モンゴルンソーニンピチック」の記者を「遠東報記者」とし、「外蒙古独立ヲ宣シ」を「外蒙古の独立を宣伝し」(宣伝外蒙古独立)とし、「外蒙古ノ独立ノ基礎固マリ、内蒙古ハ全然之ト離レタルヲ以テ」を「ロシアは外モンゴル独立の基礎を固め、内モンゴルに干渉したくないため」(因俄国 為鞏固外蒙古独立的基礎、不願牽涉内蒙古)とするなど、誤訳が見られる。

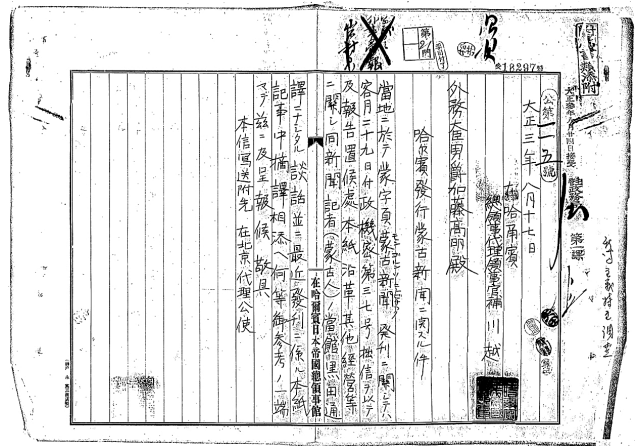
5 本稿では、同定期刊行物の名称を現代モンゴル語の発音と正書法にしたがい、「モンゴリーソニンピチグ」と書くこともあるが、他の研究との調和(さらに長い名称の定期刊行物が多い)などにより、一律片仮名表記をせず、また、略語をつくらず、基本的にモンゴル文字ローマ字転写による原名に漢字語の訳名を付けて対応する。

6 国立公文書館アジア歴史資料センター・レファレンスコード: B03040837700。

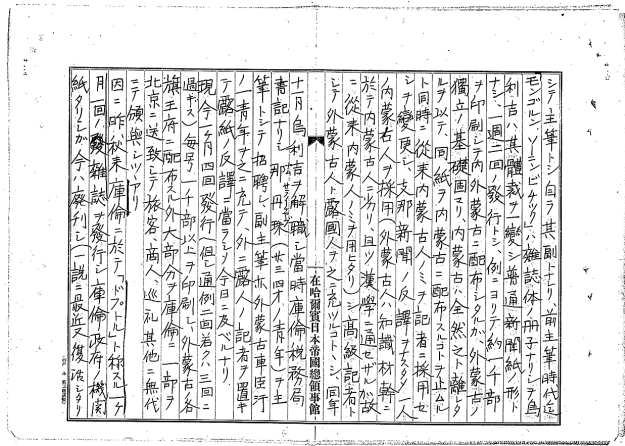
7 後述するが、アルマスオチルは「趙鶴亭」という別名で知られている。本稿では引用以外は「アルマスオチル」と表記する。



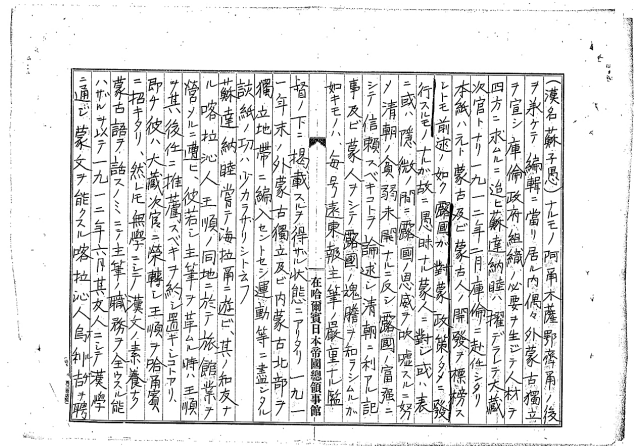
2



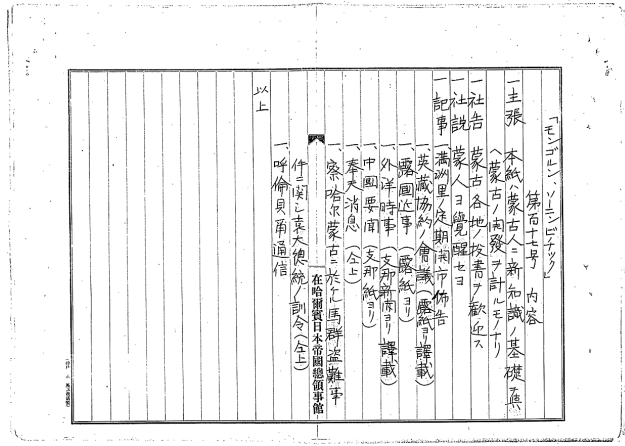
1



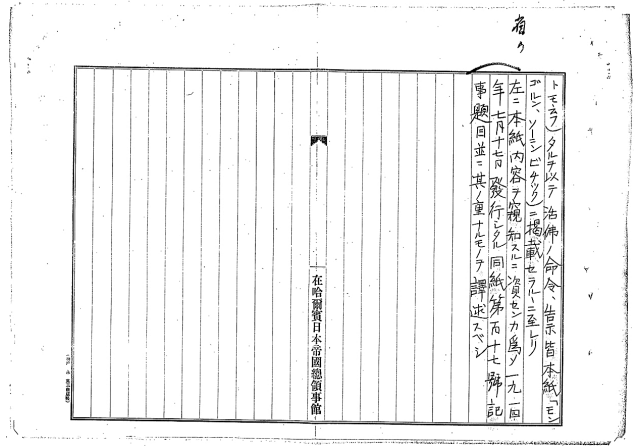
4



3



6



5

写真①「哈爾賓發行蒙古新聞ニ関スル件」(右から左へ、上下3段、6枚)
出典: 国立公文書館アジア歴史資料センター・レファレンスコード: B03040837700。

ン人のオルヂ(烏利吉)を主筆とし、自らその副となった。
オルヂは前主筆時代まで「雑誌」であったモンゴリーソニンビチグを普通の新聞紙の形にし、一週間に二回発行した。例によって発行数は約1000部で、それを内外モンゴルに配布したが、外モンゴル

独立の基盤が固まり、内モンゴルが外モンゴルと離れたため、同紙を内モンゴルで配布するのを止めると同時に、従来は内モンゴルのモンゴル人のみを記者に採用していたことを変更し、内モンゴルのモンゴル人は中国語の新聞を翻訳するための一人のみにし、高級記者として外モンゴルのモンゴル人とロシ

ア人を充てた。

それによって、同年 11 月にオルズは解職され、当時フレーで税務局書記を務めていたナムサライチャブ(那丹珠)という二十三、四歳の青年を主筆として招聘し、副主筆にも外モンゴルのツェツェンハンの一青年を充てた。ほかにロシア人の記者をおき、ロシア語の新聞の翻訳を担当させた。

1914 年の時点では、最多の場合一ヶ月に四回発行し(但し、通例二回、もしくは三回のこともある)、毎号 1000 部以上を印刷し、外モンゴル各旗王府に配布するほか、大部分をフレーに、一部を北京に送致して旅客、商人、巡礼その他に無償で配布している。ちなみに、前年(1913)秋以来、「庫倫政府」機関紙としてフレーで一ヶ月に一回発行されてきた「ドブトル」⁸と称する雑誌が廃刊(一説に最近また復活した)したため、活仏の命令、告示をすべて本紙(モンゴリーソニンビチグ)に掲載するに至った。

そして、「哈爾賓發行蒙古新聞ニ関スル件」には「左ニ本紙内容ヲ窺知スルニ資センカ為メ一九一四年七月十七日發行シタル同紙第百十七號記事題目並ニ其ノ重ナルモノヲ譯述スベシ」とあるが、原稿用紙の枠の上には「省ク」と記されている。

1914 年 7 月 17 日発行 No. 117 の所蔵は現時点では確認されていないが、No. 118⁹における掲載内容は、本紙の広告のほか、太い文字で書かれた sonusyal¹⁰(「ニュース」)に「満洲里でつくられた大市場」と小文字のコラムとして sigümjilel(「評論」、モンゴル国内務大臣親王ダー・ラマの死去について)、sonusul(「ニュース」、モンゴル政府機関からの宣伝に

ついて)、sigümjilel üge(「論評」、モンゴルと中国の軍事訓練について)、qudalduyan-u jüil(「商業」、ハイラルで創られた市場について)、orus ulus(「ロシア国」、ロシアの大学生たちがフランスで歓迎されたこと)、yadaγadu ulus(「外国」、日本人による吉林、奉天への移民政策の宣伝)、Sin-e sonusul(「新聞」、ジリミン・チョールガンの情勢について張將軍への報告など)、sin-e sonusyal(「新聞」、中国陸軍の反乱についてなど)であった。

二. *Mongyul-un sonin bičig* (蒙古新聞) の名称と世界各地での所蔵状況

1. 本定期刊行物の名称について

モンゴル語の定期刊行物名称がまだ定着していなかった時代に創刊された本定期刊行物の名称および、この「ソニンビチグ」という名称がその後のモンゴル語定期刊行物名称に与えた影響などについては、拙論「モンゴル語定期刊行物名称考」の中で論述している¹¹。その詳細については拙論に譲ることにし、ここでは、本定期刊行物を考察するにあたり、モンゴル語名称の意味と中国語による本定期刊行物名称の記述およびロシア語の表記などについて記述するにとどめたい。

本定期刊行物の名称としての *Mongyul-un sonin bičig* を日本語に直訳すれば、「モンゴルの珍しい書き物」となるだろうが、より正確には「モンゴル語で書かれた珍しい書き物」である。本定期刊行物が雑誌から新聞に変わってもこの「ソニンビチグ」という名称には変化がなかった。それについて筆者

8 「ドブトル」はおそらく「デブテル」、つまり、「冊子」の意味であろう。具体的には、1913 年 3 月にフレーで創刊された *Sin-e toli kemekü bičig* という雑誌のことを指しているだろう。G. デレグによれば、この雑誌は外モンゴルにおける最初の定期刊行物である (G. Deleg. 1965, p. 66)。最初の 4 号が「雑誌」で、その後新聞の形となったため、一時は廃刊になったと思われていたであろう。現在、本誌の No. 1 と No. 2 が東京にある東洋文庫に、No. 3 と No. 4 がウランバートルの国立図書館に所蔵されている。それに、No. 1-4 がサンクトペテルブルクの国立図書館に所蔵されていることを筆者は、2014 年 9 月にモンゴル科学アカデミー歴史研究所の S. Chuluun とともに確認している。実際、本誌の編集者(ツェウエーン・ジャムツラーノ)は、本誌を「ビチグ・デブテル」とも表現している (*Sin-e toli kemekü bičig* No. 1, p. 2)。そのころは「雑誌」のことを「デブテル・ビチグ」と呼ぶこともあった。

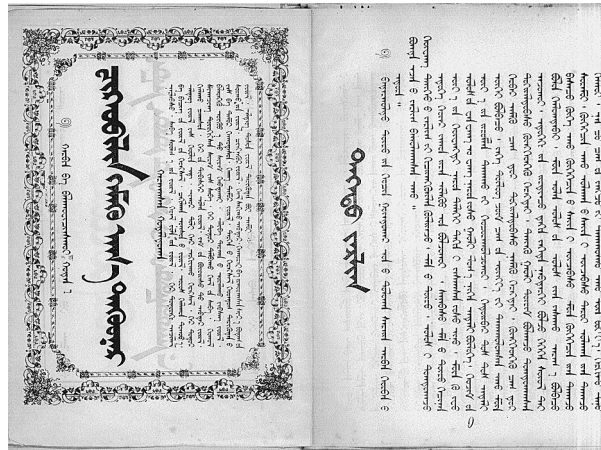
9 モンゴル国国立中央文書館所蔵。しかし、発行日はここに見る No. 117 と同じく、7 月 17 日(旧暦 6 月 9 日)となっているが、漢字では「俄歴七月十八號」である。

10 sonusyal は、*Mongyul üsüg-ün bodurul* (蒙話報) では「要聞」の訳となっているが、その意味でなら「重大ニュース」であろう。モンゴル語の語構成上の意味は「聞かせること」である。

11 フフバートル 1997a, 52-56 頁。



写真② *Mongγul-un sonin bičig* 雑誌 No. 1 の表紙



写真③ *Mongγul-un sonin bičig* 雑誌の広告 (左) と内容 (右) (清朝皇帝の「諭旨」)



写真④ 1912年に張家口で刊行された *Sonin bičig* 誌

は以前次のように解釈している¹²⁾。

これは *sonin bičig* が当時そのモンゴル語が意味する通り、「新しい見聞を掲載する書き物」を指し、「雑誌」と「新聞」をとくに区別することなく、定期刊行物一般を意味して使われていたためであろう。

それは、中国語では少なくとも 1901 年まで定期刊行物は日本語でいう「新聞」と「雑誌」の区別がなく、両方とも『報』と呼ばれていたことと関係があったと考えられる¹³⁾。

本定期刊行物のモンゴル語名称は、モンゴル文字の体裁自体も創刊号の No. 1 (1909. 5. 2¹⁴⁾) から現在確認できる雑誌の最終号である No. 56 (1912. 9. 15) まで一貫し、新聞になってからも変わらなかった。雑誌の段階では表紙に中国語もロシア語もなく、モンゴル文字の表記のみで、番号がアラビア数字で書かれていた。しかし、現在確認できるところでは、新聞の No. 16 (1913. 5. 27) には右から左へ「報日賓爾哈」と書かれた中国語の表記が現れ、No. 27 (1913. 8. 22) も書き順は右から左へであったが、内容が「報日文蒙賓爾哈」となっていた。中国語の表記は、現存の資料では No. 135 (1915. 2. 3) の段階で消えている。ロシア語の表記は現存の資料では No. 118 (1914. 7. 17) から確認され、新聞名は

Mongγul-un sonin bičig というモンゴル文字の表記の下に Монголунъ Сонинъ Бичикъ と、モンゴル語の名称がそのままキリル文字で表記され、その下に中国語で「哈爾賓蒙文報」と記され、漢字表記は左から右へと変わっている。その下段に号数「No. 118」が付されている。

このように、ここでわかることは、本定期刊行物はロシア語名称がとくになく、中国語では「哈爾賓日報」、「哈爾賓蒙文日報」、「哈爾賓蒙文報」と名称が推移しているが、中国語表記は本定期刊行物の実態から考えれば後者の「哈爾賓蒙文報」がより適切であったろう。このようにここでは、トゥイメル(忒莫勒)などによる本定期刊行物に関する一連の記述に見られる「蒙古新聞」に中国語名称としての根拠を見つけ出すことはできず、結果的に、中国語表記の「蒙古新聞」がどこから来たのかとの疑問が生じた。「哈爾賓發行蒙古新聞ニ関スル件」による日本語の訳名がそのまま中国で使われたのではないかと考えたいところであったが、忒莫勒 1988 ですでにこの名称が使用されている。その謎を解くため、トゥイメル本人に直接電話で確認した。結果は、「漢語名称を見た覚えがなく、モンゴル語から訳したものだと思われる」であった。そうであるなら日本語の場合とまったく同じで、その結果を「偶然の

12 フフバートル 1997a, 52 頁。

13 フフバートル 1997a, 47 頁。

14 定期刊行物発行の年月日については、「宣統」と「共戴」の年号を西暦に換え、月日は旧暦の記載のまま記述する。

一致」と考えるしかないが、謎が完全に解けたわけではない。ちなみに、中国語で「新聞」は「ニュース」の意味で、「定期刊行物」を意味しない。

ところで、本定期刊行物の名称である *Mongγul-un sonin bičig* の *Sonin bičig* (ソニンビチグ) をそのまま雑誌名にしたモンゴル語定期刊行物が 1912 年に、中華民国内務部によって張家口で創刊された¹⁵。名称ばかりでなく、表紙の文字のデザインも *Mongγul-un sonin bičig* に酷似していた(写真④)。これはモンゴルに近いハルビンでロシア側が刊行を継続するモンゴル語定期刊行物である *Mongγul-un sonin bičig* を中国政府が強く意識したためであろう。実際、張家口で刊行されていた *Sonin bičig* 誌の内容は北京からの報道ばかりで、地元張家口と関連のある記事はまったくなかった¹⁶。

2. 本定期刊行物の世界各地での所蔵状況と

主な引用状況

ここでは *Mongγul-un sonin bičig* (蒙古新聞) の世界各国での所蔵状況が調査時点でそれぞれどうであったかについて、具体的に記述し、*Mongγul-un sonin bičig* についての研究における引用状況を見る。

中国

忒莫勒編著 2010 (396 頁) によれば中国領内で所蔵されている *Mongγul-un sonin bičig* は、内蒙古自治区図書館所蔵 No. 52, No. 217 のみである。2009 年 3 月に筆者はハルビンで黒竜江省図書館、哈爾濱市図書館で調査しているが、黒竜江省档案馆には入れなかった。中国の他の資料館での調査と中国で発行された雑誌目録などから本定期刊行物に関する他の情報を得ていないのが現状である。

一方、1996 年に内モンゴル大学モンゴル学学院ブレーチン・ダルハンが「新尋獲的『蒙古新聞』(新しく見つけた「蒙古新聞」)」と題する論文で「41 期」について詳細に紹介している¹⁷。中国語で「期」

とあるため「雑誌」であろうが、所在の詳細を把握していない。

モンゴル国

2009 年 9 月の調査時点で、モンゴル国国立中央図書館に新聞の次の号が所蔵されていた。かなり傷んでいる号もあった。

号外 No. 3 (1911. 1. 20), 号外 No. 5 (1912. 2. 5)–13 (1912. 4. 5), 号外 No. 20 (1912. 5. 21), No. 59 (1912. 11. 15?), No. 16 (1913. 5. 27), No. 23 (1913. 7. 24), No. 27 (1913. 8. 22), No. 118 (1914. 6. 9), No. 135 (1915. 2. 3), No. 145 (1915. 4. 30), No. 160 (1915. 8. 28), No. 163 (1915. 9. 21), No. 177 (1916. 1. 11), No. 191 (1916. 5. 3), No. 198 (?), No. 204 (1916. 8. 8), No. 205 (?), No. 206 (1916. 8. 25), No. 210 (1916. 10. 1), No. 226 (1917. 2. 1), No. 240 (?), No. 243 (?), No. 249 (1917. 8. 1?), No. 250 (1917. 8. 20), No. 252 (1917. 9. 12), No. 253 (1917. 9. 19), No. 254 (1917. 9. 26), No. 258 (1917. 11. 9), No. 259 (1917. 11. 21), No. 261 (1917. 12. 20), No. 262 (1917. 12. 27), No. 266 (1918. 3. 7).

G. デレグの引用状況

雑誌 No. 1, No. 11, No. 15, No. 33, No. 40, No. 44, No. 46, No. 51, No. 52, No. 53, No. 56

新聞 No. 14, No. 39, No. 45, No. 55, No. 151, No. 182, No. 204, No. 207, No. 248, No. 251, No. 254, No. 255, No. 259, No. 265

アメリカ

The Mongolia Society (Bloomington, Indiana) が 1968 年に新聞の No. 135 (1915. 2. 3), No. 151 (1915. 6. 13) をリプリントしている。

インディアナ大学図書館に雑誌の次の号がマイクロフィルムの形で所蔵されている。東洋文庫の資料から撮影した蓋然性が高い。と言うのも、同図書館には東洋文庫所蔵の『蒙話報』もマイクロフィルムの形で所蔵され、写真の状態が似ている。

15 忒莫勒編著 2010, 407 頁。

16 忒莫勒編著 2010, 408 頁。

17 忒莫勒 2009, 65 頁。

マイクロフィルムの中に写っている目録は No. 9 (1910. 10. 26)-42 (1913. 9. 1) (36, 37 missing) である。筆者は 2013 年 9 月の調査で No. 9 と No. 10 を確認し得ていないが、インディアナ大学の資料を使用したブレンは、No. 9 を使用している。ブレンの記述には No. 38 が欠けている¹⁸。No. 38 は表紙が見つからず、番号が見えないため、日付を元にサクトペテルブルグ国立図書館の所蔵分から確認することができた。インディアナ大学のマイクロフィルムは、前半には左から 1-3 行黒くて見えないページが多く、後半には文字全体が黒くて見えにくいものが多い。撮影の問題もあるように思われる。

ロシア

サクトペテルブルグ国立図書館に雑誌の次の号が所蔵されている。保存状態はよい。

No. 1 (1909. 5. 2)-56 (1912. 9. 15).

上記ウスペンスキーの研究で使用されているようである。

日本

東京外国語大学モンゴル語研究室に新聞の次の号が置かれ、教員の閲覧が可能であった。筆者は 1996 年ころ、その所蔵状況を調査し、複写を入手できたため、1997 年 10 月に提出した博士号請求論文の「カタログ」に新聞の以下の号を記載することができた¹⁹。

No. 181 (1916. 2. ?), No. 183 (1916. 2. ?) - 192 (1916. 5. 10), No. 194 (1916. 5. 24)-215 (1916. 11. 19), No. 217 (1916. 12. 8)-219 (1916. 12. 2)-221 (1916. 12. 17) - 229 (1917. 3. 12), No. 231 (1917. 3. 20) - 267 (1918. 3. 19), No. 273 (1919. 3. 1)

No. 219 と No. 221 が「1916 年 12 月」であるのは、閏月のためであろう。No. 273 が 1919 年 3 月であるのも誤りであろう。No. 267 から単純計算すると 1918 年 5 月頃と推定される。

1912 年 6 月から本定期刊行物の主筆となったオ

ルヂは、東京外国語大学蒙古語学科の講師だったウルジー（施雲卿）ではないかという推測がある²⁰。ウルジーは四人目のモンゴル人講師として、1925（大正 14）年から 1941（昭和 16）年まで 16 年間東京外国語大学蒙古語学科でモンゴル語と中国語を教えた²¹。オルヂがそのウルジーと同一人物であれば、東京外国語大学に赴任後、自ら執筆し、雑誌から新聞に換えた *Mongγul-un sonin bičig* を取り寄せたとしても不思議ではないが、東京外国語大学は *Mongγul-un sonin bičig* を後からまとめて取り入れたのではなく、発行当時、定期購読していたとみられる。紙面のトップにロシアの郵便切手やロシア語と日本語による住所と日付が直接貼り付けられている新聞が多いことがそれを裏付けている。

日本ではこのほか、東洋文庫に雑誌の No. 17 (1910. 3. 10), No. 18 (1910. 4. 9) が所蔵されているが、同定期刊行物名称で検索できない資料として、上記 No. 9-35, No. 38-42 が所蔵されていると考えられる。実際、忒莫勒編著 2010 (396 頁) にも記載がある。

日本での主な引用や利用状況として、ボルジギン・ブレン（布日額）2012 (37 頁) を見ることができる。雑誌 No. 9-35, No. 39-42 インディアナ大学図書館。

上記のように、実際 No. 38 も含まれているであろう。

No. 52 (1912. 4. 1) 内蒙古自治区図書館所蔵新聞 No. 16, No. 24, No. 27, No. 118, No. 145, No. 160, No. 163, No. 177, モンゴル国立図書館所蔵

No. 24 は No. 23 の間違い、「国立図書館」は「国立中央文書館」(Undesnii Töv Arkhiv) の間違いであろう。

No. 181, No. 183-192, No. 194-215, No. 217-219-221-229, No. 231-267, No. 273 東京外国語大学図書館所蔵

18 ボルジギン・ブレン（布日額）2012, 37 頁。

19 フフバートル 1997b, 212 頁。

20 忒莫勒 2009, 70 頁。

21 二木博史 1999, 1007 頁。

No. 135, No. 151 アメリカのモンゴル協会 (Mongolia Society) が 1969 年に復刻・再版したものである。

Reproduced in 1968 by The Mongolia Society となっているため、1969 は 1968 の間違いで、協会名は The Mongolia Society であろう。

「増刊号」No. 3, No. 5-13, No. 20 モンゴル国立図書館所蔵

「国立図書館」は「国立中央文書館」の間違いである。「増刊号」は *toy-a-u yadanaki qayudasu* なので、「号外」と訳すべきだろう。

筆者は本稿において雑誌の No. 1, No. 8, No. 9, No. 52 と新聞の No. 16, No. 27, No. 118, No. 135 を引用しているが、上記各号については G. デレグが引用した一部を除き、その多くを利用できる状況である。

三. 編集者としてのハイサン (海山) をめぐって

本定期刊行物の編集陣について、「哈爾賓発行蒙古新聞ニ関スル件」では副主筆に触れることもあったが、主筆について比較的詳しい情報を提供している。上記の通り、1909 年の創刊から 1911 年の外モンゴル独立宣言ころまでの主筆は、アルムスオチル、ソドノム、王順、オルヂ、ナムサライチャブ、外モンゴルのツェツェンハンの一青年 (副主筆) であった。

これまでの研究で同定期刊行物編集陣についてもっとも多くの人名を取り上げたのは G. デレグであった。それによれば、編集者には内モンゴルのハラチン旗のアルムスオチル、ハイサンがいた。彼らは満洲による植民統治に反対し、独立した統一モンゴル国の設立を目指す人たちであった。後期の主筆 (Erkhlegch) はアギーン・ブリヤートの Ts. ツェデ

ンイシで、執筆・編集と校正のためにフレーより愛国的知識人の B. ナムスライ, D. ナムスライ, グラフジャブらが 1911 年末に現地に赴き、特別契約によって務めた。*Mongyul-un sonin bičig* の編集者たちは、主として、ロシア語、中国語、満洲語、日本語ができる教養の高い人たちであった。*Mongyul-un sonin bičig* の編集作業には、ニュースレル・フレーの有名な編集者・記者 (Setgüülch) のバドラフバートル (世襲制の公), D. ボドー, ジャムツァラーノらが最初から積極的に参加していた²²。

フレーにいた編集者たちが *Mongyul-un sonin bičig* の編集作業に最初から加わったとは考えにくい。ここでは、「哈爾賓発行蒙古新聞ニ関スル件」による情報およびこれまでの研究を踏まえ、内モンゴル出身のハイサンが *Mongyul-un sonin bičig* の編集作業に加わったかどうかについて分析を行う。

ハイサン (海山, 別名: 海元) 公は、カラチン右旗管旗副章京で、上級管旗章京の于芝昌と上記ソドノムを含む「喀喇沁 (ハラチン) 三杰」の一人であった。「扶清滅洋, 除胡掃北」のスローガンをもつ「義和団」関連集団の反乱を鎮圧し、捉えられた首謀者の自殺で逆に訴えられ、それをグンセンノロブ王が守ろうとしなかったため、1902 年の冬、脱出せざるをえなかった。その後、ハルビンのロシア領事館に約 4 年間避難を求め、1907 年に外モンゴルに到り、外モンゴルの統治者たちに才能を認められた²³。その後のハイサンは、フレーでモンゴル独立を訴えつづけ、「ハイサンがフレーに来なかったら、外モンゴルに独立ということもなかっただろう²⁴」という表現で知られるほど、外モンゴル独立に重要な役割を果たしている。しかし、1915 に蒙藏院総裁として北京にいたグンセンノロブに招致され、袁世凱に蒙藏院副総裁の職務を与えられたが、1917 年に北京で病死した²⁵。海山のフレーでの活動については多くの記述と研究があるが、当時フレーに駐

22 G. Deleg 1965, p. 57.

23 汪国均 2006, 208-220 頁。

24 「如無海山來庫 (倫), 外蒙或不至有獨立之事」。国民政府駐庫倫 (フレー) 辦事大員であった陳籙の『止室筆記』商務印書館 1917, 109 頁。(中見立夫 1976, 127 頁。汪国均 2006, 220 頁)。

25 汪国均 2006, 220 頁。

在していたロシアの外交官で、『蒙古近代史』（コロストヴィエツ 1943）という著書でも知られる I. Ya. Korostovets の日記が近年モンゴル語に翻訳された。それにはハイサンとの面談の内容が多く記述されている²⁶。ハイサンの学問上の業績としては1917年に出版された訳書の *Mongyul kitad bičig-iyer qabsuruysan tabun жүг-үн ақуу аялауы биçig* (『蒙漢合璧五方元音』) が知られている²⁷。

しかし、ここまでの記述からはハイサンが *Mongyul-un sonin bičig* の編集者であったことが見えてこない。フィンランドの東洋学者のラムステッドの『七回の東方旅行』にハイサンが登場することは、中見立夫 1976 をはじめ、研究者たちが取り上げてきたことでもある。そこでハイサンは「顔にあばたがある、大柄の醜い南モンゴル人」と表現され、「ハイサンは変わった人物だ。数年間ハルビンで最初のモンゴル語の新聞を発行し、モンゴルの歴史に関する論文をモンゴル語で書いたこともある」と書かれている²⁸。ここでハイサンが「数年間ハルビンで最初のモンゴル語の新聞を発行し」という、ラムステッドの証言を得たことは貴重である。しかし、ラムステッドが初めてハイサンに会ったのは1909年である。ハイサンがフレーに着いたのが1907年だとすれば、この「数年間」とはいつからいつまでを指すのか。いずれにしても *Mongyul-un sonin bičig* が創刊された時期とは一致しない。

これについてトゥイメル（忒莫勒）も疑問視し、「哈爾賓發行蒙古新聞＝関スル件」にハイサンが取り上げられなかったことを指摘している。トゥイメルは「蒙犯」としてのハイサンを内密に追跡する中国側の歴史資料を分析しながら、ハイサンがフレー

に着いたのが1908年であろうと推測している。そして、ハルビンの新聞社がモンゴル語の新聞を新設予定であったという1906年9月の情報を取り上げ、その時ハルビンにいたハイサンがその企画に加わった可能性を否定できないため、ラムステッドの証言が信憑性をもったのだろうとみている²⁹。旧モンゴル人民共和国の資料における「ハイサン参加説」は、基本的に B. シレンデヴの『19-20世紀の境におけるモンゴル』（ロシア語版、1963、73頁）によるものではないかと考えられる³⁰。もし、ラムステッドの記述がハイサンと *Mongyul-un sonin bičig* を結びつける最初の説であった³¹なら、シレンデヴの記述がそれを踏襲した可能性がある。コロストヴィエツも「東支鉄道の管理部が蒙古文の新聞を出したが、それは『教養ある』言葉や、此處ではわからないチャハルの方言で書かれてゐた」と述べているが、ハイサンやハラチンには触れていない³²。

一方、ブレンは、「海山が編集に加わったということについては再考の余地がある」という拙論³³などを取り上げながら私見を述べている。ブレンは、ハイサンが本定期刊行物の編集に加わったという見解をもち、その根拠としてまず、Navangnamjil 1946³⁴を参照し、「ハイサンは外モンゴルに1907年に来て一時滞在した後、『東南方面』のモンゴル人たちの状況を知るため内モンゴルに戻ったと考えられる」とみている³⁵。そのうえで、*Mongyul-un sonin bičig* No. 9 (1909. 10. 26) の記事を引用し、「ハイサンとアルマスオチルがハラチン右翼旗を離れた理由および、彼らが MSB (*Mongyul-un sonin bičig*) の編集にかかわっていたことを示す」ものとみて、その「無署名記事はハイサンとアルマスオチ

26 Ivan Yakovlevich Korostovets 2010.

27 フフバートル 2011。

28 グスタフ・ラムステッド、荒牧和子訳 1992、231頁。

29 忒莫勒 2009、69頁。

30 G. Deleg 1965、p. 57.

31 忒莫勒 2009、69頁。

32 コロストヴィエツ 1943、254頁。

33 フフバートル 2011、126頁。

34 Navangnamjil, G. 1946, *Güng Qayisan-un tuqai*, ShUA-yn Tüükhiin khüreeleengiin gar bichmeliin san F3, D1, KhN 1036 (モンゴル国科学アカデミー歴史研究所). ボルジギン・ブレン (布日額) 2012、55頁。

35 ボルジギン・ブレン (布日額) 2012、44頁。

ル自身が書いた可能性が高いといえよう。特に MSB の創刊（1909 年 5 月）からイフ・フレーに着く 1909 年 12 月頃までの時期にハイサンが編集に加わっていたことはほぼ確実であろう。」と結論づけている。ブレンの推定では、「1909 年 12 月」はラムステッドがハイサンに出会った時期である³⁶。

ブレンの二つの根拠のうち、前者に関しては、さしあたり資料がないため、私見は述べられない。ブレンが *Mongyul-un sonin bičig* No. 9 の「モンゴル・ホショー（*Mongyul qošiγu*）」欄から引用した記事は、No. 8（1909. 8. 28）にあった記事の後半部分で、ブレンはこれを見ていない可能性がある³⁷。No. 8 でのタイトルは「貪欲な裏切り者、下劣な奴隷は恥を知らぬ」（*Qobduγ jalaqai, douradu boqul-un niqur abqu ügei*）で、内容は、「北京からの来客の話」として、ボヤンビリグトとその父親のチョロー（本記事では Čulu）を誹謗中傷するような書き方であった³⁸。ちなみに、ボヤンビリグトとは本稿でもその著書を参照している汪国均のことで、ボヤンビリグト（汪国均）とアルマスオチル（趙鶴亭）の関係については、汪国均 2006 の「校注」をした瑪希は次のように書いている³⁹。

趙鶴亭が罪の裁きを恐れて脱出した後、彼（汪国均）が趙に代わって管旗章京となった。無名の人物が突然重用されたことに一時は猜疑が多発し、ある人たちは、彼（汪国均）が趙の汚職行為を訴えたと疑い、匿名の手紙まで書いて是非を捏造したため、彼は黙って立ち去らざるを得なかった。事件後、貢（グンセンノロブ）王は人を使って、彼を探し出して連れ戻し、

息子の篤多博に学業を教授させるため北京に行くように命じた。こうであったにもかかわらず、（彼は）『蒙古紀聞』の中で趙鶴亭（モンゴル名アルマスオチル）に言及した際に、趙の才能を多く褒め称え⁴⁰、（彼への）不満を一言も漏らさず、泰然とし、個人の恩讐に一向にとらわれていない。

この書き方は、「校注者」としてその著者に肩入れをしている面があるかもしれないが、*Mongyul-un sonin bičig* の記事の書き方はある意味ではハイサンとアルマスオチルの「逃亡」についての説明、または代弁であり、これまでの研究に異なる立場からの資料を提供したことになる。ブレンはその後もこの資料について分析を続けている⁴¹。

アルマスオチルという人物に関しては、次にまとめる内容が基本的な情報として知られていた⁴²。

ハラチン右旗のグンセンノロブ王が学校の創設や軍事教育を含む新式教育及び一連の維新を継続した二、三年後、その経費の負担ができなくなるという厳しい経済的困難の状況に陥った。グンセンノロブは王府の貴重なコレクションなどを北京まで運んで売ることにより経費づくりにあたってにもかかわらず、その収入はわずかで、各学校の教師の給料を払い続けるには程遠いものだった。やむをえずグンセンノロブは、旗政会議で旗の牧地に新たな入植者を募集することを提案したが、支持者はなく、みんな沈黙を守っていたところ、ある若い長官が支持を訴え、しかも自らその仕事を引き受けようとしたので、王は彼を開墾員兼王府総官に任命した。この若い長官がアルマスオチル、中国語名、趙鶴亭であった。

36 ボルジギン・ブレン（布日額）2012、44 頁。

37 ボルジギン・ブレン（布日額）2012、37 頁にあるように、ブレンが当該論文執筆のために参照したと考えられる資料には *Mongyul-un sonin bičig* No. 8 が含まれていない。ちなみに、筆者は近年まで収集した *Mongyul-un sonin bičig* のほぼすべての号をブレンの研究に提供している（無論、それに対し、ブレンは謝意を述べている。ボルジギン・ブレン（布日額）2012、37 頁）が、上記の通り、No. 8 は筆者が 2014 年 9 月にペテルブルグで入手したばかりの資料である。

38 *Mongyul-un sonin bičig* No. 8（1909. 8. 28）、pp. 39-43.

Mongyul-un sonin bičig No. 9（1909. 10. 26）、pp. 46-56.

39 汪国均 2006、11 頁。

40 主に「喀喇沁王府王爺地剿殺拳匪之役」に見られるアルマスオチルの戦術についての描写（213-125 頁）を指しているだろう。

41 ボルジギン・ブレン（布日額）2014。

42 呉恩和、刑復礼 1962、124-125 頁。

それから一年経たないうちにアルマスオチルの仕事は成果をあげ、旗の財政収入が大幅に増加したため、経済困難の解決に大きく役立った。しかしその反面、アルマスオチルはその収入を着服し、私腹を肥やして、思う存分贅沢した。それが守正武学堂の生徒数人により訴えられたので、激怒した王は、法により裁くべきであるとしたようだが、その情報を得たアルマスオチルは家族全員を連れて逃れた。その後東モンゴルの各旗を転々として、ハルビンに住みつき、他郷で客死した。

ここでの焦点はハイサンが *Mongyul-un sonin bičig* の編集に加わったかどうかである。その問題にアルマスオチルも深くかかわっているようである。*Mongyul-un sonin bičig* のその関連記事は、伝聞表現法 (kememüi, genem) を用いているが、ブレンが指摘しているように、「外へ行ったハイサンとアルマスオチルの考えとしては」(γadaysi yabuγsan qayisan almaswčir nar-un sanaly-a bolbasu) などの表現が見られ、また、「ボヤンビリグトラが現地モンゴル語の新聞を出して彼ら(ハイサンとアルマスオチル)を誹謗していると聞いているため、現在、わが新聞社がその詳細について書き、彼らがしたよい人への中傷を取り消そうとした」など、「被害者」の力が入ったメッセージが伝わっていることは確かである。しかし、これらはかならずしもハイサンが執筆に加わったことの十分な証拠にはならず、ハイサンと同じ立場であった編集者のアルマスオチルが一人で書くことも可能であっただろう。いずれにせよ、この議論は今後の課題として残るものであろう。

四. *Mongyul-un sonin bičig* (蒙古新聞) の評価と刊行目的

1. 民族独立の視点と革命政権からの評価

清朝末期、王朝の弱体化につれて、その支配下にあった各民族に独立のきざしが見えてきた。1905年に中国同盟会が日本で結成された後、中国革命運

動による定期刊行物が海外から中国国内へ浸透し、各地で革命的定期刊行物が急速に増えた。1905-1909年に中国人革命家たちによって創刊された定期刊行物は、東京で出されたものだけでも23種類で、大半が月刊誌だった。こうした海外での定期刊行物の影響により、1905-1911年に中国国内で創刊された革命的定期刊行物は、上海と広州にそれぞれ15種類あったほか、湖北で10種類、そして、北京ですら3種類の新聞が出されていた。定期刊行物は他の地域でもいろいろ発行されていたが、その大多数が同盟会により創刊されたもので、中には秘密のものもあった⁴³。中国同盟会などが掲げた革命的理念などは別とし、これらの定期刊行物の発行により漢民族が目指した目的は明らかであった。それは満洲人による清朝の支配からの解放であり、民族の独立であった。漢民族の民族独立への強い願望は同盟会の結成より以前、1903年に上海で発行された『革命軍』という小冊子に次のように綴られている。革命宣伝のためのこの小冊子は辛亥革命当時、発行量が最大であった⁴⁴。

わが中国は今日、革命をせざるを得ない。

わが中国は今日、満洲人の羈縛より離脱したい。

革命をせざるを得ない。わが中国は今日、独立をしたい。

革命をせざるを得ない。わが中国は世界の列強と強く立ち並ぶたい。

すなわち、満洲人から解放されるために、独立のために、そして、世界の列強と強く立ち並ぶために、中国人(漢民族)は革命をしなければならないという、中国革命の性質がここに端的に示されている。

しかし、中国の漢民族と同様に満洲人の支配下にあったモンゴルやチベットなどの出版状況はどうであっただろう。これらの民族は世界の列強と互角に立ち並ぶことまでは望めなかったが、他民族の支配下に苦しんでいた民族として、漢民族と同様に民族独立への強い願望をもっていた。中国全体の政治的

43 方漢奇 1981(下)第八節~第十二節。

44 方漢奇 1981(上)173-175頁。

情勢の変化にともない、モンゴルなど「辺境地」の諸民族にも自らの意思が反映できるメディアとしての出版物、とりわけ定期刊行物の発行がますます必要になっていたが、モンゴルに関しては独自の定期刊行物が出せない状態が続いていた。その理由は編集陣の人材や印刷技術などといったモンゴル人の知的水準の問題よりも、むしろ経済的力にあった。その後の定期刊行物が明かしているように、そのころのモンゴルやチベットの各地域では、定期刊行物の発行を急いでいたにもかかわらず経済的事情により実現できない状態であった⁴⁵。そうした状況の中でモンゴル人たちの要望に応じるように、東清鉄道の遠東報館から *Mongyul-un sonin bičig* (蒙古新聞) というモンゴル語の定期刊行物がハルビンで発行されはじめた。自ら定期刊行物が出版できなかった当時のモンゴル民族の独立運動にとって、この定期刊行物が果たしたメディアとしての役割が重要であったことは、その後のモンゴル人民共和国における本定期刊行物への評価によって示されている。モンゴル人民共和国科学アカデミー歴史研究所から出版さ

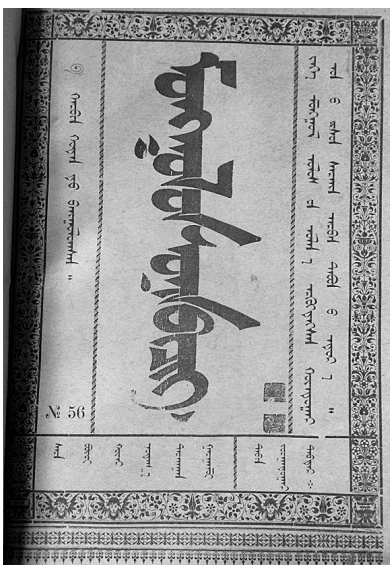
れた『モンゴル人民共和国史』には、*Mongyul-un sonin bičig* の刊行の意義が次のように書かれている⁴⁶。

モンゴリーソニンビチグは、ある意味において、モンゴルの民族解放運動のメディアとして、その多くの号に民主主義の進歩的思想を反映させていた。この新聞は満洲、中国の蹂躪から解放され、モンゴルの自由と独立を回復するための闘争に重要な役割を果たした。

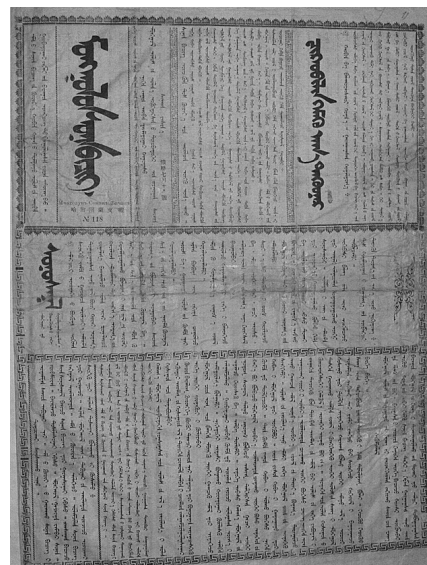
モンゴル民族の独立国家における革命政府側が *Mongyul-un sonin bičig* をこのように評価しているため、モンゴル革命の父であったスフバートルの画像にも本定期刊行物が登場している。写真⑤の、レーニンの画像を背景に書き物をするスフバートルの手前のテーブルに置かれていた雑誌が *Mongyul-un sonin bičig* であった。旧モンゴル人民共和国の「朝」(öglöö) という映画ではスフバートルの背後にあるレーニンの画像は、1921年の革命政権成立後まもなく、スフバートルが仏像の絵描き名人の



写真⑤ スフバートルの手前のテーブルに置かれた *Mongyul-un sonin bičig* の雑誌
(出典: C. R. Bawden 1989, 写真 11)



写真⑥ *Mongyul-un sonin bičig* の雑誌の最終号である No. 56 (1912年9月15日)



写真⑦ *Mongyul-un sonin bičig* の新聞 No. 118 (1914年6月9日)

45 *Mongyul-un sonin bičig*. No. 15. pp. 23-24. Ts. Shüger 1991. p. 199.

46 Bügüde Nayiramdaqu Mongyul Arad Ulus-un Sinjilekü Uqayan-u Küriyeleng-ün teüke sudulqu yaĵar 1986. p. 1578.

マルザンシャラブに描かせたものであった。いずれにせよ、革命政権成立当時、*Mongyul-un sonin bičig* はすでに停刊となり、スフバートルにとってこの定期刊行物は「ニュース」ではなくなっていた。とくに雑誌の方は1912年の段階ですでに新聞になっていたため、この絵に *Mongyul-un sonin bičig* が登場するのは、この定期刊行物に対するモンゴル革命政府の評価の現われであろうが、*Mongyul-un sonin bičig* が発行されてきた実態とは大きく異なるものであった。

上記の資料がこの定期刊行物の政治的役割を抽象的に讃えていたのに対し、モンゴル人民共和国の著名なモンゴル学者であったB.リンチェンはこの定期刊行物の発行先や当時の評価、そして、読者層について触れている⁴⁷。

モンゴリソニンビチグは、東清鉄道の所属機関から出されていたため、掲載する内容が国民政府筋の雑誌であった *Mongyul yerü üge-yin sedgül* (蒙文白話報 1913年1月創刊—引用者) に比べてより進歩的で、報道の内容も広がった。国際情勢やモンゴル情勢などが幾らか掲載されていたため、読者の知識を広める点でより有益だった。それに定期購読者も後者より少し多かった。官吏以外に、普通の読書人の中にも定期購読がちらほらあった。

政治的な評価に比べて、B.リンチェンの記述と評価はより具体的で、本定期刊行物の研究のために有益な情報を与えていた。旧モンゴル人民共和国および現在のモンゴル国における研究者たちの本定期刊行物への評価や認識は基本的にこのような政治的視点と学術的視点を踏襲したものと考えられ、より具体的にはG.デレグの研究の成果に影響を受けてきたものと言えよう。

2. 本定期刊行物初期の刊行目的

Mongyul-un sonin bičig (蒙古新聞) というモンゴル語定期刊行物は、「哈爾賓發行蒙古新聞ニ関スル件」では、「無償ニテ内外蒙古及北京等ニ配布シ蒙人間ニ親露思想ヲ鼓吹スルコトヲ努メタ」とあった。これは当時の日本側の視点と言えよう。

では、当時の中国側はこの定期刊行物をどうみていたであろう。当時、奉天で発行されていた『盛京時報』が *Mongyul-un sonin bičig* について次のように報じたという⁴⁸。

現在ロシアが発行しているモンゴル文字の雑誌はモンゴル地帯に大きく広がり、モンゴル人がたいへん好んで読んでいる。それによってモンゴル人が啓蒙すれば、今後モンゴルで改変的な政策を実施するうえで大きな障害になる。もし、理藩院と教務を実行する部門がモンゴル文字の新聞を刊行して対抗しなければ、将来モンゴル人はロシアに傾く気持ちをもつことになる。これについては駐ロシア大使に電話で知らせた。

それに対する *Mongyul-un sonin bičig* 側の反応は次の通りである⁴⁹。

これをわが新聞社が見てまことに驚いている。このような発想や考え方は夢にもなかったことである。

わが社がモンゴル語の新聞を発行した当初からの目的は、われわれ内外モンゴル各部のモンゴル人同胞たちが中国語が読める人が少なく、外国の学問を学ぶ人はもっと少ないので、現在の時代がどのように変わっているかをわかりやすく理解させ、啓蒙することであった。それはわが中国がモンゴル人を教育し、豊かにし、さらに、漢人かモンゴル人かの区別なく、ともに憲法を作りあげ、それを宣言し、幸福になるという高度な目的にも合致するものである。

さらにそれは、わがモンゴル人同胞たちがよしあ

47 B. Rinčin 1990 I, 22.

48 *Mongyul-un sonin bičig* No. 9 (1909. 10. 26). p. 20.

この議論については、ブレンも注目しているので、詳細はボルジギン・ブレン (布日額) 2014. pp. 49-51 に譲り、ここでは本誌の発行目的を考察する材料として取り上げることにとどめたい。

49 *Mongyul-un sonin bičig* No. 9 (1909. 10. 26). pp. 20-21.

しを分析し、悪いことを克服し、モンゴル仏教と地域の永遠の繁栄のために、もっとも有利なことを選択して実行し、各々が自らの土地の豊かな資源を生かすことにより、数千年以来その名誉が世界に知られてきた歴史のある本源を失うことなく、広大な地域を平和的に守り、わが大清国に万里にわたる長い守備の柵になる義務を果たすためでもあった。それ以外にまったく別の意図はない。これについてはモンゴル人の識者たちに繰り返し聞かせてきた。昔から現在に至るまでそのような考え方はなかった。それに、ロシア国内とハルビンでもそのような言い方は聞いたことがない。

「わが大清国に万里にわたる長い守備の柵になる義務を果たすため」とは、現在の中国領内に残されたモンゴル人たちが言わされてきた「祖国の辺疆を守るため」の「清朝版」のようで、ロシア側が発行していたにもかかわらず、*Mongyul-un sonin bičig* は表向きには、ロシアを警戒している姿勢を崩していなかったようである。本定期刊行物発行の目的は、つまり、「内外モンゴル各部のモンゴル人同胞たちが中国語が読める人が少なく、外国の学問を学ぶ人はもっと少ないので、現在の時代がどのように変わっているかをわかりやすく理解させ、啓蒙するため」にモンゴル語で定期刊行物を発行したということであった。

しかし、これが中国の新聞記事への弁解、または説明をするための言い方であったのか、それとも、ここでも言っているように、創刊当時の目的や方針であったのか。ここではその創刊の辞などやその後の掲載内容を見る必要がある。

Mongyul-un sonin bičig No. 1 に「創刊の辞」などはとくに掲載されていない。創刊号は最初から本定期刊行物予約のための料金説明が1頁を占め、次いで広告が3頁続く。本文の1頁から *degudü jarliy* (論旨) が始まり、6頁から「北京のニュース」、10頁から「満洲のニュース」が続き、12-21頁が「論説」(*sigümjilen ügüleksen*) で、その中で「新政」

実施後の中国の開化の情勢と伝統的生活を維持し、文明開化が進まないモンゴルの状況について述べ、開化のために新聞が果たす役割を論じている。具体的には、「新聞というものは、内外の多くの国の出来事を細かく調査し、すべてを書くので、あらゆる人の見聞を広げ、知恵を開く。そのために、新聞を読む人たちは家を出なくても世界のできごとを頭に入れることができる。それで知恵がさらに増え、役人、農夫、職人、商人のどれがいいのか、正確に選択し、その業務を成功させることができる」と書き、さらに、「中国では開化している人が南方各省に多い。北方各省では人々が今開化しはじめています。内外のモンゴル人は旗と盟が多く、分布地が広すぎるのでそのようなことを聞いていない。伝統的な生活をする事しか知らず、何が文武の学びか、計量計算か、鉄道や電話か、商業や鉱山か、天文や地理か、このような学問を知るすべはない」とモンゴル人の立ち遅れている現状について論じている。その後、本定期刊行物の創刊について次のように具体的に述べている⁵⁰。

考えてみれば、モンゴル人の知恵を開くためにはモンゴル文字の新聞(定期刊行物)を出す以外によりよい、より早い道はない。吉林省から *Mongyul üsüg-ün bodurul* (蒙話報) というのが出たけれども、何度か出て止まった。理藩院の大臣、辺境の将軍が回(ウイグル)、モンゴルの官吏に新聞を出すことについて話したけれどもまだ出ていない。(このままでは)モンゴル人はいつ開化するのか、モンゴル全体のことは地球上の多くの国々の繁栄や衰退と深い関係があるため、われわれは傍観できず、ハルビンの町でモンゴル文字の新聞を月に二回出すことにした。この4月より三ヶ月の新聞をハンや王、官吏をはじめとする地位のある人たち (*jingseten*) に好んで無料で届ける。

われわれが新聞を出した本来の目的 (*küsel sanay-a* 希望) は、モンゴル人の知恵を早く開き、自国の立憲に合わせ、また、すべてのモンゴル人が豊かにな

50 *Mongyul-un sonin bičig* No. 1 (1909. 5. 2). pp. 12-18.

ることを切に希望するためである。それ以外の考えがないことをみんなに了承してもらいたい。

ここでまず確認されたのは、*Mongγul-un sonin bičig* (蒙古新聞) の創刊目的は、本誌 No. 9 における中国の新聞記事への回答と一致していることである。さらに注目されることは、「モンゴル人の知恵を開くため」にはとくにロシア側の新聞にこだわらず、中国のモンゴル語定期刊行物でもよいということで、「ロシアによる扇動」や「中国に抵抗するモンゴルナショナリズム」といった本定期刊行物への認識はこの段階ではほとんど感じられないということである。しかし、これがたんに表向きの表記であるかどうかに関しては、実際に掲載された多くの記事や内容などについて具体的に分析することが必要であろう。

むすびに

本稿は、*Mongγul-un sonin bičig* (蒙古新聞) というモンゴル民族近代史に知られてきたモンゴル語定期刊行物に関する若干の問題についてモンゴル語定期刊行物史およびモンゴル語の近代文献資料の視点からまとめたものである。これを可能にしたのは、筆者が *Mongγul-un sonin bičig* についての考察を始めてから約 20 年後にこの定期刊行物のもっとも重要な部分である創刊号を含む初期の 10 冊を見つけたことであった。とくに創刊号は約半世紀前に書かれた旧モンゴル人民共和国の研究者 G. デレグの著作に記載されただけのものではあったため、それを利用できたことが本研究の最大の成果であり、それにより、1908 年 4 月に創刊した *Mongγul üsüg-ün bodurul* (蒙話報) に 11 ヶ月遅れて創刊しながら『蒙話報』より約 6 年長く刊行された、モンゴル近代史におけるもっとも重要な定期刊行物の一つである本定期刊行物について最新情報を記述した。実際、創刊号は本定期刊行物の出版目的を考察するうえで重要な裏付けとなり、その他の多くの関連事項を確認するうえで欠かせない存在であった。本稿は、筆者が *Mongγul-un sonin bičig* をめぐり、世界各地で資料調査を続けてきた成果をまとめた報告であり、

Mongγul-un sonin bičig についての資料調査の「中締め」である。

本稿での考察を通して、モンゴル語定期刊行物史における *Mongγul-un sonin bičig* (蒙古新聞) の位置づけについてあらためて考えられ、論じられることは次の諸点である。

まず、*Mongγul-un sonin bičig* (蒙古新聞) は、その刊行目的の文言のいかんにかかわらず、20 世紀初期というモンゴル民族の政治的存亡が問われた時代に、モンゴル人が比較的自由に発信できた最初のメディアであった。これは先行研究でも語られてきたことであるが、本稿では所蔵が確認された本定期刊行物全体を閲覧し、その重要な出典の分析をすることができた。

次いで、先行研究でもすでに利用されていたが、極端に資料不足である初期のモンゴル語定期刊行物の研究において日本外務省の海外現地からの業務報告として行われた詳細な記述を利用し、分析できたことは重要な成果であった。本稿では信憑性が高いと考えられる同資料の価値を意識し、考察の基盤にした。とくに、この資料は本定期刊行物初期の主筆たちであった内モンゴル出身の知識人たちのモンゴル近代国家への歩みに果たした役割を知るうえで重要な裏付けになると考えられる。先行研究でも指摘されているように、これまで本定期刊行物の編集者として伝えられてきたハイサン (海山) の名前がこの資料に記載されていないことが、ある意味では、本稿でハイサンが *Mongγul-un sonin bičig* の編集に加わったかどうかを考察する 1 つの契機となった。

ハイサンについての考察はたんに、*Mongγul-un sonin bičig* やモンゴル語定期刊行物の研究にかかわる問題ではなく、モンゴル民族の独立と近代国家への歩みの足跡を明らかにするうえで重要である。モンゴルの独立によってモンゴルの一部であった内モンゴルが「モンゴル」から排除されたという、モンゴル近代史の皮肉を象徴するような人物という意味でも、ハイサンと *Mongγul-un sonin bičig* とのかかわりの究明は、モンゴル民族の近代史において重要な課題の一つであり、歴史学の視点からの今後の研究成果を期待したい。

一方、世界各地における本定期刊行物の所蔵状態についての調査報告としての本稿は、*Mongγul-un sonin bičig* 研究のあらたな出発地点であり、近現代モンゴルにかかわる諸分野の研究がその資料的価値を生かしていくことは、*Mongγul-un sonin bičig* の研究にかぎらず、モンゴル研究全体に資するものとする。 *Mongγul-un sonin bičig* の研究自体に関しては、より多くの記事を分析することによりこれまでの研究を深め、広めることが期待できよう。

最後に、筆者がモンゴル語定期刊行物の収集にとりかかった本来の目的の1つは、モンゴル語語彙の近代化のプロセスを明らかにすることであった。次の目標はモンゴル語の新しい書きことばの成立過程を明らかにすることである。そういう意味で、*Mongγul-un sonin bičig* は貴重で歴大な資料提供になるが、今後は現代モンゴル語書きことばの形成の研究に重点をおき、その視点から *Mongγul-un sonin bičig* の研究を深めたい。

謝辞 本稿を完成させるうえで重要であった2014年9月におけるサンクトペテルブルグとモスクワでの資料調査にモンゴル科学アカデミー歴史研究所所長チョローン(S. Chuluun)先生とモンゴル国からの大学院生バトドルジ(Ch. Batdorj)にご尽力いただいた。ここに記して御礼を申し上げる。

参考文献

日本語

- アジア経済研究所 1986『中国文雑誌・新聞総合目録』
グスタフ・ラムステッド 1992, 荒牧和子訳『七回の東方旅行』中央公論社
コロストヴィェッツ 1943, 高山洋吉訳『蒙古近代史』森北書店
橋誠 2010『ボグド・ハーン政権の研究——モンゴル建国史序説 1911—1921』風間書房
中見立夫 1976「ハイサンとオタイ——ボグド・ハーン政権下における南モンゴル人」『東洋学報』第五七巻第一・二号
—— 2013『満蒙問題』の歴史的構図』東京大学出版会
二木博史 1999「モンゴル語—蒙古語学科の誕生と発展 一九〇八—一九四五」東京外国語大学史編纂委員会

『東京外国語大学史—独立百周年（建学百二十六年）記念—』東京外国語大学

フフバートル 1997a「モンゴル語定期刊行物名称考」『日本モンゴル学会紀要』No. 27

—— 1997b「漢語の影響におけるモンゴル語近代語彙の形成——中国領内のモンゴル語定期刊行物発達史に沿って——」一橋大学大学院社会学研究科（博士学位論文）

—— 2007「中国領内発行の古いモンゴル語定期刊行物——モンゴル語定期刊行物の所蔵と研究の状況——」『学苑』799号

—— 2011「モンゴル語近代語彙と辞書（一）——海山編訳『蒙漢合璧五方元音』（1917）——」『学苑』845号

—— 2012『モンゴル語近代語彙登場の母体——「蒙話報」誌研究』青山社

ブレンサイン 2007「ハラチン・トメド移民と近現代モンゴル社会——モンゴルジンのハイラトド氏を事例に——」モンゴル研究所編『近現代内モンゴル東部の変容』（アジア地域文化学叢書8）雄山閣

ボルジギン・ブレン（布日額）2012『『モンゴリン・ソニン・ビチグ』（1909—1919）の発行状況と論調——近代モンゴルの活字メディアとナショナリズムの萌芽——』『内陸アジア史研究』第27号

—— 2014「アルマスオチルの活動と思想——清朝末期におけるモンゴル独立運動と知識人——」（日本モンゴル学会 2014年春季大会発表レジュメ）

モンゴル語（モンゴル文字）

Begejing-deki nom-un sang-uud-tu qadaγalaγu bui mongγul qayučin nom bičig-ün nigedgegsen γarčay-i nayirayulqu duγuyilang-ača nayirayulba, 1978. *Begejing-deki nom-un sang-uud-tu qadaγalaγu bui mongγul qayučin nom bičig-ün nigedgegsen γarčay* (eke nouray).

Bügüde Nayiramdaq Mongγul Arad Ulus-un Sinjilekü Uqayan-u Küriyeleng-ün teüke sudulqu γajar, 1986. *Bügüde Nayiramdaq Mongγul Arad Ulus-un teüke II* (douradu). Öbür mongγul-un arad-un keblel-ün qoriy-a.

“Dumdadu ulus-un erten-ü mongγul nom bičig-ün yerüngkei γarčay” nayirayulqu jöblel, 1999. *Dumdadu ulus-un erten-ü mongγul nom bičig-ün*

yerüŋgkei yarčay, Begejing nom-un sang keblel-ün qoriy-a.

Mongγul sudulul-un nebterkei toli nayirayulqu jöblel, “sonin medege keblel-ün boti” nayirayulqu jöblel, 2003. *Mongγul sudulul-un nebterkei toli sonin medege keblel*, Öbür mongγul-un arad-un keblel-ün qoriy-a.

Mönggündalai, Borjigin. 1989, *Begejing-ün nom-un sang-un mongγul qaγučin bičig-ün tobči*, Öbür mongγul-un arad-un keblel-ün qoriy-a.

Nayusayinküü, Narinyolküü. 1989, *Temgetü-yin namtar*, Öbür mongγul-un sinjilekü uqayan tēgnig mergejil-ün keblel-ün qoriy-a.

Rinčin, B. 1990, *Mongγul bičig-ün kelen-ü jüi* (terigün debter), Öbür mongγul-un arad-un keblel-ün qoriy-a.

モンゴル語 (キリル文字)

Bat-saikhan, O. 2002, *Mongolyn tusgaar togtol ba Khyatad, Oros, Mongol gurban ulsyn 1915 ony Khiyagtyŋ geree (1911-1916)*, Ulaanbaatar.

Deleg, G. 1965, *Mongol togtmol khevleliin tүүkhen temdeglel*, Ulaanbaatar.

Ivan Yakovlevich Korostovets. 2010, *Mongold öngörүүлсen esөн sar* (Mongol dakhi Orosyn büren erkht tölөөлөгчiin өдрийн темдеглел 1912 ony 8-r saraas 1913 ony 5-r sar), Ulaanbaatar.

Jamsran, L. Khereed. 1997, *Mongolyn töriin tusgaar togtonlyn sergelt*, Ulaanbaatar.

Khökhbaatar. 1997, *Hytadad khevlegdsen mongol togtmol khevleliin tүүkhen materialuud ba mongol khelnii orchin üyiin üg khelleg*, Seventh International Congress of Mongolists (12 - 16 August, Ulaanbaatar) Summaries of Congress Papers.

OKA Khirokhi, Bat-saikhan, O. 2006, *1911 ony Mongolyn ündesnii khuvisgalyn uridchilsan nökhтsöl ba olon ulsyn baidal*, Tokhokü Ikh Surguuliin Zүүnkhoit Azi Sudlalyn Töv.

Shüger, Ts. 1991, *Mongol modon baryn nom*. Ulaanbaatar.

中国語

八省区蒙古語文工作協作辦公室 1979『全国蒙文旧図書資料連合目録』(蒙漢合璧) 内蒙古人民出版社

白拉都格其, 金海, 賽航 2002『蒙古民族通史』第5卷 (上) 内蒙古大学出版社

東北地方文献聯合目録編輯組 1981『東北地方文献聯合目録』(第一輯: 報刊部分)

方漢奇 1981『中国近代報刊史』(上・下) 山西人民出版社

喀喇沁历史文化研究苑資料室 2014『喀喇沁古今輯要』(合訂本 2, 3, 4, 5)

内蒙古大学図書館蒙古学部 1983『全国蒙文報刊蒙古学論文資料索引』(1939~1983, 6) (初稿) 呼和浩特

内蒙古自治区図書館 1987『建国前内蒙古地方報刊考録』(内蒙古自治区図書館叢書之一) 呼和浩特

田志和, 馮学忠著 1991『民国初年蒙旗「独立」事件研究』内蒙古人民出版社

忒莫勒 1988『『蒙古新聞』与中国蒙文鉛字印刷』(学会発表原稿) 内蒙古自治区図書館学会第二届代表大会 (海拉爾市, 1988年7月)

忒莫勒 2009「關於清末民初哈爾濱的『蒙古新聞』」『内蒙古師範大学学报 (哲学社会科学版)』第38卷 第3期

忒莫勒編著 2010『内蒙古旧報刊考録——1905—1949.9』内蒙古出版集团遠方出版社

吳恩和, 刑復礼 1962「貢桑諾爾布」中国人民政治協商會議内蒙古自治区委員会文史資料研究委員会編『内蒙古文史資料』(第一輯) 内蒙古人民出版社

汪国均 2006, 瑪希, 徐世明校注『蒙古紀聞』内蒙古人民出版社

英語

C. R. Bawden 1989, *The Modern History of Mongolia*, London and New York, Routledge.

Gerard M. Friters 1949, *Outer Mongolia and Its Internatoinal Position*, Baltimore, Johns Hopkins Press.

本論文は独立行政法人日本学術振興会科学研究費補助金 (基盤研究 (C) 研究課題番号: 24520407 「二〇世紀前半に現在の中国領内で刊行されたモンゴル語定期刊行物の研究」) による研究成果の一部である。

(フフバートル 現代教養学科)